

集落の話の聴き手だより

第18号

2025.03

今日は... 崎田



- ・坂を登ると、浅間山・佐久平・八ヶ岳が一望できる。
 - ・崎田は西村と北村で常会が分かれている。
 - ・㊦坂からの景色が自慢。
- 桜の季節にぜひ登って来てほしい。



語り手

内津 武昌さん
内津 喜重さん
渡辺 信太郎さん
飯塚 優さん

八千穂駅の裏の㊦坂。急な坂を登った先に、平らな田園風景と崎田の集落が広がります。今日は、浅間山と八ヶ岳が見渡せる、歴史深い崎田でお話を伺いました。

農家が多かった集落の様子

現在は、集落の周りには田園風景が広がる崎田ですが、みなさんがお子さんの頃は少し様子が違っていたようです。喜重さんは「蚕を飼っていた頃はおらとう、小学生くらいだから、桑拾いだよな。」と語り出します。

当時の学校では、田植え休み・稲刈り休みのように、養蚕が特に忙しい夏の時期に、蚕休みがありました。信太郎さんが「蚕休みには、自転車で売りに来たアイスキャンディーを買ってもいいぞって。」と話してくれたように、家の仕事だけでなく、楽しい思い出もあったようです。

崎田では、ほとんどのお宅が農家で、養蚕をしていました。お話を伺った崎田公民館は、生まれたばかりの小さな蚕の飼育所だったそうです。

養蚕の衰退後は、桑畑を果樹やホップ、菊畑に変化させていきました。8割ほどのお宅では菊の栽培をしていましたが、信太郎さんと優さんのお宅では、りんごを作っていたといいます。果樹の畑は、崎田から東電の貯水池へ続く道の方にあり、りんごだけでなく、桃の畑もあったため、「桃畑」と呼ばれていたそうです。「畑の周りは、カラタチの木で囲ってあってね。」と、みなさん当時を懐かしみます。貯水池への道は、穂積小中学校への通学路でもあったそうです。



崎田と隣の花岡集落の様子。集落を囲むように田畑があります。



崎田を一望する写真を見ながらお話を伺いました。

七曲がりの㊦坂と、盛んだった溜め池スケート

崎田集落の周りは、ぐるっと畑ばかりだったそうです。水田について尋ねると、「(旧八千穂)小学校のへんから、中学校のテニスコートのあたりまで田んぼで。(境田地区には)崎田の田んぼが、結構あったんです。」と、武昌さんが答えてくれました。

水田へは㊦坂を下って行きますが、当時は今と違ってカーブが多く、「七曲がり」と呼ばれていました。収穫したお米を崎田まで運ぶために、牛車を使いました。みなさんが子どもの頃の崎田では、馬はほとんどいなかったといいます。牛を飼っている家がほとんどで、田んぼの仕事にも牛を使いました。

牛車なら、境田地区から米を運ぶのも簡単だと思いきや、「あそこ(㊦坂)は水が出るから。道がぬかったり。牛車でも大変だった。」と、当時の苦労を信太郎さんが教えてくれました。

また3月くらいになると、雪も溶けてきて、坂道は泥がひどくなるそうです。「長靴で坂を下って、それじゃ汚れて汽車に乗れないから、(八千穂駅の)石炭小屋で靴はきかえて。」と、優さんが高校生の頃のお話もしてくれました。

喜重さんは、「おらとう、小学校の頃、草履だよ。」と、笑います。信太郎さんも、「雨降ると重くなって。」と、当時を懐かしんでいました。

佐久穂町に合併してからは、役場や学校などが海瀬の方に移りました。その影響で、現在は㊦坂よりも茂来館方向の道を使うことが多いそうですが、㊦坂は崎田のみなさんにとっては思い出深い場所なのだと思います。

また、水田が境田地区に多いのは、崎田周辺に水源が少なかったことも一因でした。そのため、崎田と花岡にはため池がいくつかあります。冬になると凍るので、よくスケートをしたそうです。朝早くから、ため池でスケートをして、そのまま学校へ登校することも。善重さんの写真には、八千穂南小が廃校になる前のグラウンドリンクが写っています。スケートが盛んだった当時の様子が分かります。



喜重さんが撮影された、八千穂南小のグラウンド

子どもの頃から身近な場所 諏訪神社と千手院

子どもの頃の思い出といえば、「御嶽神社のお祭り」と、みなさん声を揃えました。崎田には、諏訪大社の上社と下社の二社があります。諏訪神社では、春祭り、秋祭り、そして11月に行われる御嶽神社の祭りの、3回のお祭りがあるそうです。八千穂村誌民族編によると、諏訪神社で御嶽神社のお祭りをするのは、『御嶽神社は、農作物の神様である。明治43年、筆岩から崎田諏訪神社に合祀された』ためなのだそうです。

信太郎さんは「御嶽神社のお祭りの時は、半日、午後が休みになってね。」と、当時のことを教えてくれました。諏訪神社は、昔は崎田の他にも天神町・穴原・中央・高岩の集落が氏子となっていたそうです。お祭り当日は、崎田集落の端の方にある上社から集落の中心まで出店が並び、野沢の方からも人が集まるほど盛大でした。

また、お宮の隣には土俵があり、お祭りの日には崎田の子どもたちが相撲をとりました。青柳さんという髭の長いおじいさんが行司をするのが恒例で、参加すると勝っても負けても景品にノートや鉛筆をもらえるといいます。

お祭りの日は十日夜と同じ日に行うので、子どもたちは夕方からは、十日夜の藁でっぼうを行いました。

今でも元旦には拝賀式が行われます。今年も集落のみなさん40名ほど、お年寄りから子どもまでが集まり、一緒に参拝されていました。拝賀式は上社で行いますが、その後に下社へお参りに行くご家族もいらっしゃいました。



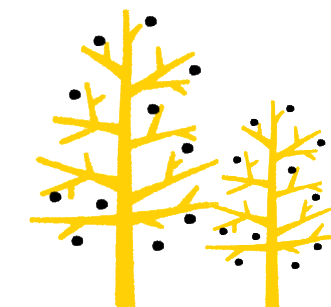
今年の拝賀式の様子。
参拝後、お神酒やみかんがふるまわれました。

養蚕、藁作り、卓球、演芸大会 盛りだくさんの分館活動

また崎田にはそれ以外にも、諏訪神社上社お隣の善福寺と、崎田公民館近くの千手院(平林の千手院とは宗派が違うそう)があります。

「子どもの頃、(千手院の中で)柔道やなんかどたんばたん遊んだんだけど。」と、話すのは優さん。千手院の中には、100体の仏さまがいたそうですが、災害や盗難にあい現在は80体ほどになってしまいました。また、仏さまとは別にお寺を開いた潮音さんの木像も置かれています。子どもの頃は、この木像が怖かったというエピソードも伺いました。

お話して下さったみなさんは、昔に比べて集落の人が少なくなってきた行事も減ってきていると少し寂しそうでしたが、元旦から集まるみなさんの姿には、まだまだつながりの深さを感じました。歴史深い崎田のお話を聴かせていただき、ありがとうございました。



聴き手	川嶋 愛香
	天田 かよ子
文章	川嶋 愛香
編集	櫻井 麻美
デザイン	西澤 ユキ



宿岩 と 人の暮らし



宿岩は他の集落と違う特色がある。通常、千曲川を挟んで川西と川東には異なる集落が存在するが、宿岩は川西だけでなく千曲川を挟んで川東にも集落が伸びている。



今年のどんと焼き

こやの はるお
小谷野春雄さんは宿岩に住み始めて43年目になる。小海町笠原で生まれ育った。小学4年生までは歩いたら1分もかからない分教場で過ごした。
「私ら悪ガキ3人組は、よくいたずらをしては、先生に叱られてました。小学4年生の遠足の帰り道、3人だけで小海線の鉄橋を歩いているのを見つかり、翌日は半日廊下に立たされました。放課後の当番をさぼって相木川で魚釣りをしているのを見つかり、こっぴどく怒られたこともあります。隣のクラスは授業中なのに廊下で騒いで校長先生に叱られたことはたびたびでした。悪ガキだったけれど、人をぶったり、いじめたりはしなかった。中学生の時、鷹を飼ったことがあります。檻に入れたわけではなく、自然に寄って来たので、口笛を吹いたりするとなついてくれた。可愛いからカエルを捕ってきて食べさせたりした。ある日、その鷹を捕まえて、小諸の動物園に売った人がいた。その時は、本当に切なかったです。」と春雄さんは当時を思い出そうに話してくれた。

春雄さんは悪ガキで勉強はしなかったけれど、先生には大事にされたという。
「中学3年生の時、先生は私ら3人組を山登りに連れて行ってくれました。その時です。私ら3人組は大事にされているんだなと実感したのは。一度は東京に出てみたいと



薪割り中の春雄さん

いう強い思いを後押ししてくれ、母親を説得してくれました。必ず地元に戻ってくるという約束を先生としたので、今の自分があります。先生から『差別と選別』はいけないよと教えられ、『人を大事にしない』と言われたことは忘れません。そのおかげなのか、人を嫌いにはならないです。」
「子どもの時の遊びで一番の思い出は、『38度線』という遊びです。朝鮮半島にある北緯38度線に引かれたアメリカ軍とソ連軍の占領分割ラインのこと。誰が名付けたはわかりません。地面に7, 8人は入る円を描きます。その周りに波型の円周で囲みます。その波型の円周の中に7, 8人が入り、一周するときに何人残るかで勝ち負けが決まる。中心の円にいる子どもたちは、外側の波型円周を一周しようとする子どもを枠外に押し出す。波型なので狭い所を通る時が外に押し出すチャンス。はっこい子どもは上手に一周できます。そんな遊びを中学生までやってました。運動神経が良くなる遊びでしたね。それにみんなで遊びました。小さい子どもが遊びたいと言えば、一緒に遊びました。全員で遊ぶというのが当たり前でした。遊んであげなければ親に怒られました。今思うと人と人が助け合ってきた良い時代でしたね。」

山が大好きだと言う春雄さんは、定年退職後に炭焼きとキノコ栽培を始めた。キノコ栽培に適したコナラ（小櫓）の木を原木として使うそうだ。コナラの細い枝や幹は炭焼きに使う。炭焼きといってもぼや炭を作る。昔は炬燵が炭炬燵だったので需要があったのだが、炭炬燵をしている家はほとんどなくなってしまったそうだ。炭焼きもキノコ栽培も規模は小さくなったが、早起きして山に入り、仕事をする毎日を過ごしている。

今は息子さんが一緒に山に入って手伝ってくれるので、助かるといいます。
「人生は楽しいですね。」と最後にまとめてもらった。

.....
高見澤益男さんの家は、佐久穂町では一番北側にあり、すぐ隣が旧臼田町（現在の佐久市入沢）になる。
「ここが佐久穂町で一番標高が低いんです。」と益男さんが教えてくれた。益男さんは上区新田の生まれ。
中学卒業まで暮らしていた。「家から佐久西小学校までは3, 5kmぐらいあったので、1時間くらいかかりました。

低学年生は集団登校だったので、友達と話しながら歩いていたので苦にはなりませんでした。クラスは松、竹、梅に分かれていて、私は松のクラスでした。夏の遊びは山に入ってカブトムシを捕まえたり、田んぼにいるホタルを捕まえて、ビンに入れて眺めてました。それだけで楽しかったです。弁当を持って沢蟹を取りに行ったこともあります。家で飼ったこともあるし、焼いて食べたこともあります。冬は北沢川が凍るので、その氷を足で割ったり、段差のある田んぼの土手の下には雪の吹き溜まりが出来るので、雪をめがけて飛び降りたりした遊びをしました。あとはパッチン（めんこのこと）でよく遊びました。取ったり取られたりしましたが、私は強かった思い出があります。」

両親は養蚕業をしていたので、家の手伝いは桑の葉を集めて耕運機の後ろに付けたりヤカーに積み込む仕事ぐらいだったそうだ。初めは家で蚕を飼っていたが、手狭になったので、パイプハウスを建てて、その中で養蚕をしていたと教えてくれた。

益男さんは中学を卒業すると東京にある企業内学校へ進学した。実習を含めた勉強を3年間学び、そのままその企業の現業所に配属された。長野県内だけでなく、山梨県、東京都での転勤を繰り返し、退職する。

宿岩には40年弱暮らしてきた。退職後、『今日は何をするかな。』と考える生活は嫌だと思い、菊作りを始めた。「もう13, 4年になります。全くの素人だったので、農協の新規栽培者講習会に参加して、文字通り手取り足取りいろいろと教えてもらいました。一番役に立ったのは菊作りの大先輩の助言です。経験者の教えは違います。的確に教えてもらいました。今でも、相談に行きます。」と益男さん。

最後に菊作りの難しさを表現した言葉が出てきた。「だんだんへタになる。」と益男さんは謙遜して言った。天候に左右されることが多く、出荷のタイミングを合わせるのが難しいと言う。「菊作りは、一年を通してやることがあります。秋の出荷が終われば、来年用の苗を育てなければいけません。『今日は何をするかな。』と考える暇はありません。人には『よくだに。』と言われるますが、楽しいんですよ。」と益男さんは嬉しそうに語ってくれた。



庭先に立つ益男さん

鈴木光雄さんは、明龍寺17代目の住職である。曹洞宗のお寺で、380年ぐらいの歴史を持つ古寺である。
お寺の息子ということで特別扱いはされましたかと尋ねると、「それは全くなかったです。でも、学校で飼っていた動物が死んだとき、担任の先生からお経をあげてくれと頼まれて困ったことがあります。低学年だったので、お経も知らなかったですから。たぶん小さな鐘を持って行き『チーン』ぐらいはやったかもしれません。」と笑いながら教えてくれた。

「学校の思い出は、給食の時間が一番楽しみでした。なにせ、年中腹を空かせてました。冬はスケートの思い出がいっぱいあります。スケートが好きだったんでしょうな。母ちゃんにおにぎりを作ってもらって、上区の大張まで行き、山を越えると佐口湖に出るんです。子どもの足で1時間の上はかかるところまでスケートをしに行っていました。それまでは上区の中尾にある池で滑っていたので、佐口湖を見たときはその大きさに驚きました。夏は、八十巖橋の下が泳いでもいい場所で、みんなそこで泳いだりしました。泳ぐといっても学校では教えられてないので、犬かきぐらいしかできません。その代わり、潜って魚取りをしました。ハヤが取れたので、持って帰って母親に料理してもらいました。

遊び道具は全部自分たちで作ってました。木の皮を剥いで、口にはさんで音を出したり、竹の一節を切って片方の節に穴を開け、片方は切り落とし、『ホーホケキョ』と吹いて鳴らすんです。楽しかったです。みんな上級生から教えてもらいました。上級生の遊びを真似するんです。自分たちで工夫して遊び道具を作っていました。子どもの想像力はすごいです。なんでも遊びにするんですから。今考えるといい時代でした。友達関係、上下関係はありましたが、その中でしっかりとまとまってました。十日夜の時、わら鉄砲を作って羽黒下まで行き、子どもたち同士でちょっとした口喧嘩をしても上級生たちは私たち下級生を守ってくれました。一つの集落が一つの家族のような時代でした。おじいさんもおばあさんも悪さをする子どもがいれば、お構いなく叱ってました。私なんかも『またおめいか、お寺の息子がそんなことしていいかい!』とよく言われました。みんなが見ていてくれた時代でした。」と当時を懐かしむように語ってくれた。



松の木の下に立つ光雄さん



(文責 西村寛)

